蒲郡を愛した文豪たち

～秋の夜長に、読書のススメ～

風光明媚な蒲郡の地は、これまでに多くの文学者たちが繰り返し訪れ、文学作品の舞台に登場しています。今号では、「読書の秋」にちなみ、蒲郡と豊かな関わりのある文学者とその作品をご紹介します。

企画広報課 ☎66◆1145

明治時代、名古屋市で呉服商を営んでいた滝信四郎は、静養に訪れたこの地を気に入り、「料亭常磐館」、「竹島橋」、「蒲郡ホテル」の建設を手がけました。

この常磐館や蒲郡ホテルは、後に多くの文学者に愛され、ここで多くの名作が生み出されることになります。

菊地 寛

古くは、大正11年に発表された菊地寛の長編小説『火華（ひばな）』が有名です。

「蒲郡の海！　それは、瀬戸内海の海のやうに静かだ。低い山脈に囲まれ、その一角が僅（わず）かに断（たた）れて、伊勢湾に続いて居る。風が立つても、白い波頭が騒ぐ丈（だけ）で、岸を打つ怒濤（どとう）は寄せては来ない。」

このように、冒頭には蒲郡の風光の美しさが描かれ、常磐館を舞台に小説は始まります。

常磐館（写真は昭和初期のもの）
明治45年に建設され、料理旅館として開業。各界名士の宿泊や、地元商人の商談などに利用された。昭和57年に取り壊される。

谷崎潤一郎

『火華』で紹介された後、多くの作家がこの地を訪れ、その作品の中に紹介されることになりますが、中でも有名なのは、谷崎潤一郎の大作『細雪』です。この下巻の冒頭では、登場する四姉妹の中で、三女雪子が大垣方面での見合いの帰りに、蒲郡まで旅行をするシーンがあります。上巻執筆中に太平洋戦争を経験した谷崎は、軍部の強権により発表停止になりつつも書き続けますが、下巻の冒頭は戦争が終わった時に、開放的で明るい蒲郡の海を思い浮かべて小説に登場させたと思われます。

『細雪』全編

志賀直哉

谷崎の結婚の媒酌人を務めた志賀直哉は、小説の神様とも呼ばれています。昭和16年1月の蒲郡滞在中に、若き日の師を回想し『内村鑑三先生の憶い出』を書いたことで知られます。

川端康成

川端康成も、大正14年に常磐館を背景とした短編『驢馬（ろば）に乗る妻』を発表しています。常磐館に設けられた馬場を舞台にしたこの小説では、妻とその姉と主人公との葛藤が描かれています。小説の最後は、「丘の南は四月のやうに霞んで見える、二つの半島に抱かれた、暖かい蒲郡の海だ。鶴が鳴いた。」で結ばれています。主人公の妻に対する冷酷な態度は、東三河の冬なお温暖な自然と対比されつつ描かれています。

三島由紀夫

この小説が書かれた年に生まれた三島由紀夫は、プライバシーをめぐる訴訟の先駆けともいわれる小説『宴のあと』の主人公の新婚旅行先を蒲郡に設定しています。

この秋、皆さんもこれら文豪たちが愛したこの地を、あらためて作品の中から見つめ直してみてはいかがでしょうか。私たちが日々暮らしているこの地は、かの文豪たちがこれほどまで愛し、賞賛した地でもあるのです。

なお、今号で紹介した作品は、すべて市立図書館にあります。また、海辺の文学記念館では、これらの資料が展示されています。詳しくは、各所へお尋ねください。

（文：小塩卓哉）